

## V. 社会連携

### 1. 社会人の受け入れ状況

社会学研究科は、社会科学の分野において、専門性と総合性を併せ持つ研究者と学識ある高度な専門的職業人を育成することを教育目標に掲げ、総合社会科学専攻では、各専門分野における学術探究とその総合的発展を担う意欲と創造性を具えた人材の育成を目指している。そうした教育の一環として、総合社会科学専攻においては、社会人の経験を生かした学習研究の機会拡充（リカレント教育）に対する社会的要請に応えることを目的に、社会人特別選考（募集人員は若干名）を実施している。また、地球社会研究専攻では、実務経験を持つ受験生も多く、そのための大学院教育も実施している。

以下は、社会人特別選考の2002年～2020年度のデータ（志願者数、合格者数、入学者数）である。

2002年度入学				
志願者数	第一次試験合格者数	合格者数	辞退者数	入学者数
11	5	3	0	3
2003年度入学				
志願者数	第一次試験合格者数	合格者数	辞退者数	入学者数
25	13	10	0	10
2004年度入学				
志願者数	第一次試験合格者数	合格者数	辞退者数	入学者数
26	—	7	1	6
2005年度入学				
志願者数	第一次試験合格者数	合格者数	辞退者数	入学者数
19	8	3	1	2
2006年度入学				
志願者数	第一次試験合格者数	合格者数	辞退者数	入学者数
17	9	4	2	2
2007年度入学				
志願者数	第一次試験合格者数	合格者数	辞退者数	入学者数
9	7	5	1	4
2008年度入学				
志願者数	第一次試験合格者数	合格者数	辞退者数	入学者数
19	9	7	0	7

2009年度入学				
志願者数	第一次試験合格者数	合格者数	辞退者数	入学者数
13	4	2	0	2
2010年度入学				
志願者数	第一次試験合格者数	合格者数	辞退者数	入学者数
11	5	2	0	2
2011年度入学				
志願者数	第一次試験合格者数	合格者数	辞退者数	入学者数
10	3	0	0	0
2012年度入学				
志願者数	第一次試験合格者数	合格者数	辞退者数	入学者数
10	4	3	1	2
2013年度入学				
志願者数	第一次試験合格者数	合格者数	辞退者数	入学者数
15	5	2	0	2
2014年度入学				
志願者数	第一次試験合格者数	合格者数	辞退者数	入学者数
12	8	6	0	6
2015年度入学				
志願者数	第一次試験合格者数	合格者数	辞退者数	入学者数
12	7	4	2	2

2016 年度入学				
志願者数	第一次試験 合格者数	合格者数	辞退者数	入学者数
8	4	1	0	1
2017 年度入学				
志願者数	第一次試験 合格者数	合格者数	辞退者数	入学者数
11	7	6	0	6
2018 年度入学				
志願者数	第一次試験 合格者数	合格者数	辞退者数	入学者数
6	2	1	0	1

2019 年度入学				
志願者数	第一次試験 合格者数	合格者数	辞退者数	入学者数
12	5	2	0	2
2020 年度入学				
志願者数	第一次試験 合格者数	合格者数	辞退者数	入学者数
9	4	3	0	3

## 2. 公開講座・開放講座など

本学では、国立市および近隣の教育委員会等の後援によって国立キャンパスで開催される「一橋大学公開講座」（春と秋に2講座ずつ開催、2010年度より春と秋に1講座ずつ開催）や、「一橋大学開放講座」（神田一ツ橋の如水会館で開催。一部の講座は移動講座として年2回、東京以外で開催）などによって、社会との交流につとめている。本研究科の公開講座と開放講座、アカデミアの開催は以下に示すとおりである。

### 一橋大学公開講座（社会学研究科関連）

年度	講座名	講師	開催日	時間	受講者数
1985 秋	日本近代史	藤原 彰、中村政則	9/28~10/26	五回 10 時間	81 人
1986 秋	世界と日本の教育改革	中内敏夫、藤岡貞彦 関 啓子	9/27~10/25	五回 10 時間	61 人
1987 春	地中海諸国の都市政策と 都市問題	竹内啓一、内藤正典	5/23~6/20	五回 10 時間	52 人
1990 春	西洋中世の男と女	阿部謹也	5/19~6/16	五回 10 時間	140 人
1992 秋	国際化と日本社会	加藤哲郎、吉田裕 林 大樹	9/26~10/30	五回 10 時間	62 人
1993 秋	旅、地図そしてガイドブ ック	竹内啓一	9/25~10/23	五回 10 時間	153 人
1994 春	近代日本と朝鮮	妻 徳相	5/7~6/11	五回 10 時間	83 人
1996 秋	日本と世界の教育問題と 教育改革	藤岡貞彦、木村 元 関 啓子、久富善之 藤田和也	9/28~10/26	五回 10 時間	56 人
1998 秋	高齢化社会と介護保険	藤田伍一、下和田功	9/26~10/24	五回 10 時間	67 人

2000 春	近代世界の形成	土肥恒之、糟谷憲一 坂元ひろ子、辻内鏡 人、渡部尚志	5/20~6/17	五回 10 時間	103 人
2002 秋	いまく哲学>に何ができ るか？	嶋崎 隆、岩佐 茂、 平子友長、古茂田宏、 森村敏己	9/28~10/26	五回 10 時間	91 人
2004 春	教育改革の焦点	久富善之、北川久美 中田康彦、木村 元 関 啓子	5/8~6/5	五回 10 時間	43 人
2005 秋	幸福のゆくえ—紛争と対 立の地球社会を生きる—	足羽與志子、落合一 泰、ジョナサン・ル イス、宮地尚子	10/8~10/29	四回 8 時間	53 人
2007 春	市民社会論—思想・理 論・現代的課題	渡辺雅男、平子友長 林 大樹	5/19~6/16	五回 10 時間	49 人
2009 春	雇用と生活のセーフティ ネット	高田一夫、林 大樹 浅見靖仁、猪飼周平 木本喜美子	5/16~6/16	五回 10 時間	58 人

一橋大学開放講座（社会学研究科関連）

回数 年度	テーマ	講師	参加者数
第 341 回 2001.04.19	ブラックプロパガンダとは何か— 心理戦争と謀略— 防衛計画の大綱について	早稲田大学政治経済学部教授（前 一橋大学社会学研究科教授） 山 本武利 防衛庁防衛局長 首藤新悟	80 人
第 348 回 2002.05.09	広がる福祉の民営化 福祉とスポーツ—90 年代以降の日 本の課題—	有料老人ホーム「グリーン東京」社 長 滝上宗次郎 一橋大学社会学研究科教授 内海和 雄	44 人
第 353 回 2003.04.16	企業内キャリアアップのプロセス と課題—女性を中心に 職場のなかのジェンダー —女性 労働を再考する	(株)東京ガス都市生活研究所長、東京 女学館大学客員教授西山昭彦 一橋大学社会学研究科教授 木本喜美子	65 人
第 370 回 2005.11.10	たがが外れた社会 研究大学の社会学 —日本とアメ リカの比較—	日本放送協会 解説主幹 山田 伸二 一橋大学社会学研究科教授 矢澤 修次郎	130 人

第 375 回 2006.10.19	デモクラシーは「罪悪の制度」か —東アジアの経済発展と民主化 中国近現代の秘密結社と黒社会	拓殖大学国際開発学部助教授 甲斐 信好 一橋大学社会学研究科教授 三谷孝	160 人
第 380 回 2007.10.04	世論調査に流される世論 ポストモダンと環境思想	立教大学社会学部教授 井川充雄 一橋大学社会学研究科教授 岩佐茂	70 人
第 385 回 2008.06.19	退職後年収を合理的に想定できて いるか？ 公的年金改革の総括	フィデリティ退職・投資教育研究所 所長 野尻哲史 一橋大学社会学研究科教授 高田一 夫	80 人
第 390 回 2009.05.21	国際経済、今そこにある危機—ト ヨタショック 「開発と成長」の記録—産業記録 映画の保存をめぐる	経済産業省大臣官房審議官（貿易経 済協力局担当）杉田定大 一橋大学社会学研究科教授 町村敬 志	100 人
第 395 回 2010.04.15	食と健康ビジネスの今後—コンシ ューマヘルスケアへの挑戦 弱小学問「心理学」の行方	(株)リンクアンドコミュニケーション 代表取締役社長 渡辺敏成 一橋大学社会学研究科教授 村田光 二	65 人
第 412 回 2012.11.15	植民地下朝鮮の高等女学校—卒業 生との交流を通して 歴史の読み方、語り方	岐阜大学留学生センター教授 太田 孝子 一橋大学社会学研究科教授 若尾政 希	70 人
第 417 回 2013.10.17	スペシャルドラマ「坂の上の雲」 の制作裏話 なぜ戦争の時代と向きあうのか —アジア・太平洋戦争期を中心に	日本放送協会編成局編成センター長 菅康弘 一橋大学社会学研究科教授 吉田裕	90 人
第 422 回 2014.09.18	東京が変わる！2020 年オリンピッ ク・パラリンピック大会 1964 年から 2020 年へ—ふたつの東 京オリンピックを考える	東京都政策企画局次長 武市敬 一橋大学社会学研究科教授 尾崎正 峰	95 人
第 427 回 2015.06.18	無理をしない認知症との付き合い 方—基礎から応用まで なぜ医療は地域に回帰するのか	横浜市立大学附属病院神経内科教授 鈴木 ゆめ 一橋大学社会学研究科教授 猪飼周 平	72 人
第 432 回 2016.05.19	団塊世代 教育と社会の未来— 学校の戦後史 コウタローの体験的戦後史	一橋大学社会学研究科教授 木村元 歌手、白鷗大学教授 山本コウタロ ー	153 人

第 437 回 2017.04.24	ポスト五輪の東京—にぎわいの街 づくりへの設計図— 都市は国家を超えたのか—「世界 都市」東京の過去・現在・未来 昼の仕事と夜の娯楽—「郊外」の 新たな可能性	一橋大学社会学研究科教授 町村敬 志  社会デザイン研究家、カルチャース タディーズ研究所所長 三浦展	193 人
第 454 回 2019.11.07	『欧州の巨人 プルーストとフロ イト』 マルセル・プルースト 『失われた時を求めて』の世界 フロイト 夢と文学	一橋大学社会学研究科教授 中野知 律  東京国際大学人間社会学部教授 妙木浩之	168 人

### アカデミア

2010 年 10 月 9 日 関西アカデミア（ザ・フェニックスホール、150 名）

シンポジウム 「都市の創造性」 基調講演：都市の生態学 詩人・作家 辻井喬

パネル・ディスカッション： 詩人・作家 辻井 喬

大阪市立大学都市研究プラザ所長 佐々木 雅幸、大阪市立大学都市研究プラザ副所長 水内 俊雄

一橋大学名誉教授 田崎宣義、大学院社会学研究科教授 町村 敬志

司会 大学院社会学研究科教授 林 大樹 司会 社会貢献担当役員補佐・商学研究科教授 神岡  
太郎

同時開催入試説明会（10:00～12:00） 参加者 18 組

### 3. 連続市民講座

一橋大学社会学部は、2006 年度から讀賣新聞立川支局との共催などにより、連続市民講座を開講し、市民との交流を果たしてきた。開催はほぼ一月に一回のペースで、全講座を一橋大学社会学部/社会学研究科の教員が担当した。入場料は無料・事前申込みは不要で、規定回数以上、出席した受講者には修了証も発行し、多くの市民の参加を得た。

#### 2006 年 「現代」という環境—10 のキーワードから

4 月 22 日（土）	渡辺 雅男	下流社会—格差という社会環境
5 月 20 日（土）	嶋崎 隆	エコロジー—地球生命圏という自然環境
6 月 17 日（土）	尾崎 正峰	ワールドカップ—グローバル化の中のスポーツ環境
7 月 15 日（土）	林 大樹	まちづくり—参加と協働の人間環境
9 月 16 日（土）	木村 元	少子化—歴史の中の教育環境
10 月 21 日（土）	古茂田 宏	ミーム・プール—遺伝する文化環境

11月18日(土)	木本 喜美子	雇用平等—職場というジェンダー環境
12月16日(土)	宮地 尚子	トラウマ—日常のメンタルヘルス環境
1月27日(土)	加藤 哲郎	インターネット—情報という疑似環境
2月17日(土)	渡辺 治	憲法改正—憲法という環境の現在

読賣新聞立川支局の共催

2007年 「市民の社会史」

4月21日(土)	三谷 孝	秘密結社の社会史—20世紀中国の場合
5月19日(土)	吉田 裕	戦争の社会史—アジア・太平洋戦争の戦場と兵士
6月16日(土)	若尾政希	物語の社会史—日本近世の場合
7月21日(土)	多田 治	観光の社会史—沖縄イメージを旅する
9月15日(土)	パネリスト 渡辺雅男 古茂田宏 林 大樹	看取りの社会史—地域コミュニティとケア 国立市市制施行40周年特別企画、共催：NPO 在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク
10月20日(土)	ジョナサン・ルイス	ソフトウェア開発の社会史—開発者の自由、企業の利益、政府の立場
11月17日(土)	久富善之	教師の社会史—教員世界の誕生・変遷・日本的独自性と今日的課題
12月15日(土)	森村敏己	世論の社会史—18世紀フランスの場合
1月26日(土)	倉田良樹	雇用の社会史—会社員にとっての市民社会
2月16日(土)	濱谷正晴	反「受忍」の社会史—〈原爆と人間〉の視座から

2008年 「つながり」の<<再>>発見～人と社会のコミュニケーション

4月19日(土)	関 啓子	ひとと緑を育み、ひととひとをつなぐ～環境保護の学習
5月17日(土)	社会学部主催日中国際シンポジウム	
5月18日(日)	(一橋大学社会学部、清華大学人文社会学部、中国社会科学院政治学研究所)	
6月21日(土)	深澤 英隆	現代世界の宗教～宗教による人々のつながりと断絶
7月19日(土)	中島 由美	ことばのつながり・社会のつながり
9月20日(土)	久保 哲司	感性と社会～文学作品に見るその関係
10月18日(土)	稲葉 哲郎	メディアと対人関係
11月15日(土)	土肥 恒之	日本学を拓いたロシア人～エリセーエフとネフスキー
12月20日(土)	山崎 耕一	思想の伝播と影響 ～18世紀フランスにおける啓蒙思想家と読者の知的交流

1月24日(土)	足羽 與志子	違いを超えて～暴力の記憶と和解への道
2月21日(土)	田崎 宣義	くにたちの町づくりと大学～人のつながり・人のちから

2010年 ローカル、ナショナル、グローバル—世界は小さくなったのか

4月17日(土)	伊豫谷登士翁	ローカル、ナショナル、グローバル～グローバル空間のローカルな編成
5月15日(土)	糟谷 憲一	世界・アジアのなかの日朝関係～19世紀後半から現在まで
6月19日(土)	マイク・モラスキー	日本におけるジャズ受容～異文化の摂取・消化・再生を考える
7月17日(土)	小井土彰宏	地域の中でせめぎ合うグローバルとナショナル～北米大陸での経験
10月16日(土)	浅見 靖仁	タイの外国人労働者受け入れ政策～医療保険と子供の教育問題を中心に
11月13日(土)	春日 直樹	フィジー～公立老人ホームで考える
12月18日(土)	岡崎 彰	音響・国境・望郷～ローカルな音楽がグローバル化するとき
1月22日(土)	伊藤 るり	〈庇護の地〉フランスの変容と苦悩—英仏海峡トンネルの町・カレーの事例から

後援：国立市・国立市教育委員会・立川市教育委員会・小平市教育委員会・府中市教育委員会・武蔵村山市教育委員会・国分寺市教育委員会

2011年 「常識」を問う—社会科学の多様な視点

4月23日(土)	町村敬志	常識はなぜ常識なのか—常識の「非—常識」な基盤を考える
5月21日(土)	坂上康博	スポーツにみる“常識”をめぐって—昭和、女性、2006ワールドカップ
6月18日(土)	若尾政希	社会通念・常識から時代と社会を読み解く
7月16日(土)	高田一夫	高齢化の常識と非常識
9月10日(土)	坂元ひろ子	中国の纏足とモダンガール
10月15日(土)	安川一	この目で見るとまでは信じられない?—視覚社会学への招待
11月12日(土)	大杉高司	キューバの宗教儀礼から、私たちの「価値」を顧みる
12月17日(土)	村田光二	「常識」が働く心理過程—社会的ステレオタイプを例として

後援：国立市・国立市教育委員会・立川市教育委員会・小平市教育委員会・府中市教育委員会・武蔵村山市教育委員会・国分寺市教育委員会

2012年 戦争と暴力—社会科学からのアプローチ

4月21日(土)	吉田裕	なぜ戦争の時代と向きあうのか—アジア・太平洋戦争期を中心に
5月19日(土)	鈴木直文	スポーツによる社会的包摂—愉しみとしての暴力と都市貧困をめぐって
6月16日(土)	猪飼周平	暴力・犯罪と社会的排除
7月21日(土)	児玉谷史朗	冷戦後アフリカでなぜ紛争が多発したのか
9月15日(土)	大河内泰樹	グアタナモに見る現代の権力—ミシェル・フーコーの権力論から
10月20日(土)	洪 郁如	もんぺ着用—植民地台湾の戦争動員
11月17日(土)	小井土彰宏	テロとの戦争の名のもとに—9.11事件とアメリカにおける移民規制の厳格化
12月15日(土)	多田治	楽園幻想と開発・軍事の比較社会学—ハワイと沖縄を中心に

2014年 再生と変容—移りゆく社会をとらえる

4月19日(土)	猪飼周平	生活の再建 —生きる力を保障する政策とは—
5月10日(土)	中田康彦	教育改革の変容と教育再生
6月21日(土)	中島由美	ことばと文化にみる再生と変容 —沖縄と日本—
7月19日(土)	佐藤仁史	「迷信」から無形文化財へ —近現代中国における民俗文化の復興と変容—
9月20日(土)	石居人也	「東京」と向きあう地域社会の近代 —多摩から考える—
10月18日(土)	福富満久	中東における米国の覇権主義と安全保障
11月15日(土)	宮地尚子	心を護り、耕すということ
12月20日(土)	中北浩爾	自民党政治の再生と変容

読賣新聞立川支局共催

2015年 ニホン/ニッポン —日本イメージを解体する

4月18日(土)	渡辺尚志	江戸時代の村と百姓の実像
5月23日(土)	中澤篤史	(スポーツ+学校教育) ÷ 日本 = 運動部活動
6月20日(土)	伊藤るり	日本のトランスナショナルな社会空間—バリオ・フィエスタと世界のウチナンチュ大会から考える—
7月18日(土)	児玉谷史朗	日本の援助(ODA)—対アフリカ援助を中心に—
9月19日(土)	村田光二	日本人イメージと外国人イメージ



10月17日 (土)	田中 拓道	日本の自画像－政治学の視点から－
11月21日 (土)	林 大樹	日本の会社人間と社会人間
12月19日(土)	太田美幸	「日本の教育」の内と外－国境を越える子どもたちの学校経験－

2016年 「周縁から考える」－多元的世界への招待

4月16日(土)	久保明教	逆説の日本人論：現代人類学からみる『菊と刀』
5月21日(土)	赤嶺 淳	グレーゾーンを生きる－マレーシアのアブラヤシ園から考える－
6月18日(土)	森村敏己	ヴァンデから見たフランス革命とその記憶
7月16日(土)	秋山晋吾	歴史の周縁を浮かび上がらせる－18世紀と21世紀の「同じ現場」－
9月17日(土)	尾崎正峰	寛容のさじ加減－オーストラリアのスポーツに見る多文化主義の葛藤－
10月15日 (土)	木村 元	学校の戦後史－周縁の学校から考える－
11月19日 (土)	久保哲司	〈ユダヤ人〉とドイツ
12月17日 (土)	町村敬志	周縁はどこにあるのか－変化する現代都市「東京」から考える－

2018年 共生とは何か？－繋がる社会、切り離される世界－

4月21日(土)	大河内泰樹	闘争と共生－社会哲学の観点から
5月19日(土)	上田 元	東アフリカ－共生と開発
6月16日(土)	加藤圭木	日本・朝鮮半島の「共生」と歴史認識－3・1独立運動100年(2019年)をどう迎えるか－
7月21日(土)	五十嵐陽介	日本語と琉球語

(兼松講堂改修のため全4回で開催)

2010 年以降の連続市民講座の来場者数・修了証書の受領者数

	2010		2011		2012		2014		2015		2016		2018	
	開催 日	来場 者数	開催 日	来場 者数	開催 日	来場 者数	開催 日	来場 者数	開催 日	来場 者数	開催 日	来場 者数	開催 日	来場 者数
第 1 回	4/17	127	4/23	245	4/21	182	4/19	560	4/18	127	4/16	98	4/21	59
第 2 回	5/15	146	6/18	210	5/19	151	5/10	560	5/23	78	5/21	96	5/19	48
第 3 回	6/19	144	7/16	210	6/16	143	6/21	650	6/20	110	6/18	95	6/16	77
第 4 回	7/17	120	9/10	190	7/21	172	7/19	520	7/18	104	7/16	117	7/21	54
第 5 回	10/1 6	97	10/15	85	9/15	163	9/20	590	9/19	130	9/17	84		
第 6 回	11/1 3	92	10/15	160	10/20	148	10/18	550	10/17	103	10/15	78		
第 7 回	12/1 7	80	11/12	130	11/17	135	11/15	500	11/21	100	11/19	108		
第 8 回	1/22	110	12/17	195	12/15	130	12/20	520	12/19	98	12/17	93		
合 計		916		1,425		1,224		4,450		850		769		238
修了証書受 領者数								350		58		53		34

#### 4. 寄附講義

社会学研究科では、フェアレイバー研究教育センターがコーディネートして 2007 年に始まった日本労働組合総連合会（連合）と教育文化協会からの寄付による寄附講義「現代労働組合論」など、いくつかの寄附講義を開設している。社会の第一線で活躍する学外講師をお招きして、学びの機会を提供している。

##### (1) 連合寄附講義 現代労働組合論（2007 年～）

フェアレイバーセンターの高田一夫、林大樹、浅見靖仁、中北浩爾らが、コーディネーターをつとめ、毎年、開講してきた。

2020 年度春・夏学期「連合寄附講義 現代労働組合論」

5/11	導入	【開講の辞】連合寄附講義で一橋大生に学んでほしいこと	南雲弘行 教育文化協会 理事長
		労働組合の基礎知識	林大樹 一橋大学 客員教授
		働く人を守る ～ワークルールと労働組合	山本和代 連合 副事務局長
5/18	職場・地域の課題とその取り組み	職場における労働組合の役割	西原浩一郎 JCM 顧問
5/25		仕事と生活の両立にむけた取り組み	山本由美 生保労連 中央副執行委員長
6/1		中小企業における労働組合の取り組み ～魅力ある職場づくりと経営危機への対応	川野英樹 JAM 副書記長
6/8		公務労働の現状と良質な公共サービスの実現をめざす取り組み	重黒木康恵 自治労 女性部長
6/15		労働組合の組織化 ～非正規雇用労働者の処遇改善に向けた取り組み	新井美穂 UAゼンセン流通部門 執行委員
6/22		労働者自主福祉運動の取り組み	南部美智代 中央労福協 事務局長
6/29		国際労働運動の取り組み	鈴木則之 前ITUC-AP 書記長
7/6	労働組合の求める政策とめざす社会	すべての働く者のために① ～賃金に関する取り組み	石田昭浩 連合 副事務局長
		すべての働く者のために② ～雇用労働法制に関する取り組み	
7/20		【修了講義】 労働運動・労働組合とは何か ～「働くということ」を考える	相原康伸 連合 事務局長

2019 年度春・夏学期「連合寄附講義 現代労働組合論」

2018 年度春・夏学期「現代労働組合論」

2017 年度春・夏学期「現代労働組合論」

2016 年度夏学期「現代労働組合論Ⅰ」

2015 年度夏学期「現代労働組合論Ⅰ」

2014 年度夏学期「現代労働組合論Ⅰ」

2013 年度夏学期「現代労働組合論Ⅰ」  
2012 年度夏学期「現代労働組合論Ⅰ」  
2011 年度夏学期「現代労働組合論Ⅰ」  
2010 年度「現代労働組合論Ⅰ」  
2009 年度冬学期「現代労働組合論Ⅱ-労働組合の課題と取り組み-」  
2009 年度夏学期「現代労働組合論Ⅰ-労働組合とは何か-」  
2008 年度「現代労働組合論Ⅱ-非正規雇用と労働組合-」  
2008 年度夏学期「現代労働組合論Ⅰ-ホワイトカラーの働き方と労働組合-」  
2007 年夏学期「現代労働組織論」

## (2) Pride Bridge 寄附講義「ジェンダー/セクシュアリティとライフデザイン」(2019～2021)

ジェンダー社会科学研究センターでは、2019 年度よりジェンダー教育プログラム (GenEP) のフォローアップを行う新プログラムとして、「一橋プライドフォーラム」を開始した。このプログラムは、一橋大学卒業生有志団体「Pride Bridge」からの寄附講義による運営されるもので、(1) ジェンダー/セクシュアリティをより深く学びたい学生・教職員のためのリソースセンターの設置・運営、(2) LGBTQ フレンドリーな教育環境整備のための共同研究プロジェクトを実施している。

### ■Pride Bridge 寄附講義「ジェンダー／セクシュアリティとライフデザイン」

セクシュアリティやジェンダーをめぐる不平等・不寛容・不公正な状況を「自分ごと」として捉え、自らの生き方や働き方、社会との関わり方について実践的に考えたい学生のための科目です。性の多様性をめぐる現代社会の状況を理解し、大学で学ぶジェンダーやセクシュアリティについての知見を生涯にわたる社会生活や職業生活にいかにか活かしていくか、社会環境にいかにか働きかけるかを実践的に考えます。毎回ゲストスピーカーを招聘し、企業・NPO・他大学等における先進的な取り組み、法制度改正の動向、卒業生のライフコース、自治体や労組等の取り組みなどについてお話しいただきます。学期の最後には授業の成果をまとめ、学生によるワークショップやプロジェクトの実施を検討します。学部・学年を問わず、関心ある学生の履修を歓迎します。

2021 年度：秋冬学期 月 2 担当教員：神谷悠一／太田美幸

2020 年度：春夏学期 月 2 担当教員：太田美幸／神谷悠一

2019 年度：秋冬学期 水 3 担当教員：太田美幸／柘植道子

## (3) ジャーナリズム実践論 (学部・大学院) ((株)朝日新聞社) 担当：稲葉哲郎

ジャーナリズム実践論は、朝日新聞社の協力を得て開講されている寄附講義で、ジャーナリズムに関心を持つ学生を対象に、取材して記事を執筆する際の基本を身につけてもらうことやジャーナリストという仕事について自分なりに考えを持ってもらうことを目標としている。

ジャーナリストという仕事や記事の書き方について、講義、ゲストスピーカーの講演、記事の執筆などを通じて考えていく。実習的な性格をもつ授業で、記事の執筆が中心。以下は 2021 年度授業の内容。

1. 講義の進め方／取材・インタビューの基本
2. 「ひと」インタビュー
3. その場で書く

4. ひと講評 1 回目
5. 取材の現場から(1)ゲスト講師を予定
6. ひと講評 2 回目
7. 講演記事講評 1 回目／「取材して書く」の説明
8. 実名報道とは
9. 取材の現場から(2)
10. 写真实習
11. 取材記事講評 1 回目
12. 講演記事講評 2 回目
13. 取材の現場から(3)
14. 取材記事講評 2 回目／ジャーナリズムとは

#### (4) 不動産の社会科学（学部）（三井不動産(株)）担当：堂免隆浩

不動産の社会科学は、三井不動産の協力を得て開講されている寄附講義。実務経験者である三井不動産の職員が講師を担当する。以下、2021 年度シラバスより引用。

方針：モノづくりは、一般に理系の専門分野なのですが、不動産は文系出身者が携われる数少ない領域です。それは、不動産が単に建物を建設するのみでなく土地や建物を使いこなすことが求められ、ここに“人”および“社会”が介在するためです。

講義の内容は、“不動産”を切り口として、関連する社会科学の知識と、不動産の現場における最新の動向を情報提供することを目的に構成されます。

全 13 回の授業の内、一橋大学の教員が、不動産をめぐる社会科学の理論を解説します。そして、三井不動産の職員をゲストスピーカーに招き、不動産の現場における最新の取り組みの紹介を行います。

さらに、不動産に関する課題にグループ演習形式で取り組み、最後に発表を行います。

#### 【目的】

- 1) 不動産にかかわる社会科学の理論を理解する。
- 2) 不動産の現場における最新の取り組みを知る。
- 3) 不動産にかかわる将来を見通し構想する
- 4) 卒業後の進路選択の参考にする。

#### 【概要】

本授業は、講義形式およびグループ演習形式です。

- 1) 講義形式では、①一橋大学の教員による不動産に対する分析および理論の解説、および、②三井不動産職員による不動産業の現場における最新の動向の紹介を行う。
- 2) グループ演習形式では、課題テーマに対して提案を発表していただきます。課題テーマは「10 年先を見越した不動産事業の新展開」です。各グループは一つのトピックについて新展開を発表します。トピックは、(1)オフィスビル、(2)商業施設、(3)住宅、(4)海外、(5)ある場所の開発、です。初回に希望のトピックを第 1 位から第 3 位まで出していただき、1 グループ 5 名程度になるよう教員が機械的にグループ分けを行います。

現時点では、第 12 回・第 13 回目に報告会を開催を予定しています。場合により、第 11 回も報告会の開催にあてる可能性があります。(状況に応じて、進め方を変更する可能性があります。)